

海異記

泉鏡花

青空文庫

砂山を細く開いた、両方の裾が向いあつて、あたかも二頭の恐しき獣の踞つたような、もうちつとで荒海へ出ようとする、路の傍に、崖に添うて、一軒漁師の小家がある。

崖はそもそも波というものの世を打ちはじめた昔から、がツキと鉄の楯を支いて、幾億尋とも限り知られぬ、潮の陣を防ぎ止めて、崩れかかる雪のごとく鑄を削る頼母しき。砂山に生え交る、茅、芒はやがて散り、はた年ごとに枯れ果てても、千代万代の末かけて、巖は松の緑にして、霜にも色は変えないのである。

さればこそ、松五郎。我が勇しき船頭は、波打際の崖をたよりに、お浪という、その美しき恋女房と、愛らしき乳児を残して、日ごとに、件の門の前なる細路へ、衝とその後姿相対える猛獣の間に突立つよと見れば、直ちに海原に潜るよう、砂山を下りて浜に出て、たちまち荒海を漕ぎ分けて、飛ぶ鷗よりなお高く、見果てぬ雲に隠るので。

留守はただ磯吹く風に藻屑の匂いの、襷かけたる腕に染むが、浜百合の薫より、空燻より、女房には一際床しく、小児を抱いたり、頬摺したり、子守唄うとうたり、つづ

れさしたり、はりものしたり、松葉で乾物ひものをあぶりもして、寂しく今日を送る習い。

浪の音には馴なれた身も、鶏とりの音に驚おどきて、児こと添そいふし臥ふしの夢を破り、門かどひ引きあけて隈くまなき月に虫の音の集すたくにつけ、夫恋しき夜半よわの頃、寝衣ねまきに露を置く事あり。もみじのような手を胸むねに、弥生やよいの花も見ずに過ぎ、若葉の風のたよりも艫ろの声にのみ耳を澄ませば、生あやに憎待くたぬ時ほととぎす鳥。鯨の冬の凄すさまじさは、逆巻さかまきき寄する海の牙きばに、涙に氷まくらる枕を砕くだいて、泣く児ゆすを揺ゆするは暴風雨あらしならずや。

母は腕かひなのなゆる時、父は沖なる暗夜の船に、雨と、波と、風と、艫かどひと、雲と、魚と渦巻なりわいく活計なりわい。

津々浦々つづつ到る処、同じ漁師の世渡りしながら、南あたたかは暖あたたかに、北ひとすじみちは寒ひとすじみちく、一条路かたみちにも蔭かげひ日向なたで、房州も西向にしむきの、館山たてやま北条とは事かわり、その裏側なる前原、鴨川かもがわ、古川、白子しろこ、忽ごつと戸となど、就なかんずく中なかんずく、船幽靈ふなゆうれいの千倉ちくらが沖、江見和田などの海岸は、風に向いたる白帆しろとえの外には一重ひとえの遮るものもない、太平洋の吹通し、人も知しつたる荒磯ありそつみ海。

この一軒屋は、その江見の浜の波打際に、城の壁とも、石垣とも、岸を頼たのんだ若木の家や造りつく、近つくごろ別家をしたばかりで、茸ふいた茅かやさえ浅みどり、新しん藁わらかけた島田が似合おう、女房は子持ちながら、年とし紀はまだ二十三。

去年ちようど今時分、秋のはじめが初産で、お浜といえは砂さえ、敷妙の一粒種。日あたりの納戸に据えた枕蚊帳の蒼き中に、昼の螢の光なく、すやすやと寐入っているが、可愛らしさは四辺にこぼれた、暈も、縁も、手遊、玩弄物。

犬張子が横に寝て、起上り小法師のころりと坐った、縁台に、はりもの板を斜めにして、添乳の衣紋も繕わず、姉さんかぶりを軽くして、襷がけの二の腕あたり、日ざしに惜気なけれども、都育ちの白やかに、紅絹の切をびたびたと、指を反らした手の捌き、波の音のしらべに連れて、琴の糸を辿るよう、世帯染みたがなお優しい。

秋日和の三時ごろ、人の影より、黍の影、一つ赤蜻蛉の飛ぶ向うの畝を、威勢の可い声。

「号外、号外。」

二

「三ちゃん、何の号外だね、」

と女房は、毎日のように顔を見る同じ漁場の馴染の奴、張ものにうつむいたまま、徒

然らしい声を懸ける。

片手を懐中へ突込んで、どう、してこました買喰やら、一番蛇を呑んだ袋を懐中。微塵棒を縦にして、前歯でへし折つて噛りながら、縁台の前へによつきりと、吹矢が当つて出たような福助頭に向う顛卷。少兀の紺の筒袖、どこの媽々衆に貰つたやら、浅黄の扱帯の裂けたのを、繩に振つた一重まわし、小生意気に尻下り。

これが親仁は念仏爺で、網の破れを繕ううちも、数珠を放さず手にかけてながら、葎の中の小窓の穴から、隣の柿の木、裏の屋根、鳥をじろりと横目に覗くと、いつも前はだけの胡坐の膝へ、台尻重く引つけ置く、三代相伝の火繩銃、のツそりと取上げて、フツと吹くと、ぱつと立つ、障子のほこりが目に入って、涙は出ても、狙は違えず、真黒な羽をばさりと落して、奴おさえろ、と見向もせず、また南無阿弥陀で手内職。

晩のお菜に、煮たわ、喰つたわ、その数三万三千三百さるほどに爺の因果が孫に報つて、渾名を小鳥の三之助、数え年十三の大柄な童でござる。

搔垂れ眉を上と下、大きな口で莞爾した。

「姉様、己の号外だよ。今朝、号外に腹が痛んだで、稲葉丸さ号外になまけただが、直きまた号外に治つただよ。」

「それは困ったねえ、それでもすつかり治つたの。」と紅絹切もみぎれの小耳を細かく、ちよいちよいちよいと伸のばしていう。

「ああ号外だ。もう何ともありやしねえや。」

「だって、お前さん、そんなことをしちやまたお腹が悪くなるよ。」

「何をよ、そんな事ツて。なあ、姉様あねさん、」

「甘いものを食べてさ、がりがり嚼かじつて、乱暴じやないかねえ。」

「うむ、これかい。」

と目を上うわぎまに細うして、下唇をぺろりと嘗なめた。肩も脛すねも懐も、がさがさと袋を揺ゆつて、

「こりや、何よ、何だぜ、あのう、己おらが嫁さんに遣やろうと思つて、姥おんぼが店で買つて来たんで、旨うまそうだから、しよこなめたい。たつた一ツだな。みんな嫁さんに遣やるんだぜ。」

とくるりと、はり板に並んで向をかえ、縁側に手を支ついて、納戸の方を覗のぞきながら、

「やあ、寝てやがら、姉様あねさん、己おらが嫁さんは寝ねねかな。」

「ああ、今しがた昼寝をしたの。」

「人情がないぜ、なあ、己おらが旨いものを持つて来るのに。」

ええ、おい、起きねえか、お浜ツ児。へ、」

とのめずるように頸を窘め、腰を引いて、

「何にもいわねえや、蠅ばかり、ぶんぶんいつてまわつてら。」

「ほんとに酷い蠅ねえ、蚊が居なくツても昼間だつて、ああして蚊帳へ入れて置かないとね、可哀そうなように集るんだよ。それにこうやって糊があるもんだからね、うるさいツちやないんだもの。三ちゃん、お前さんの許なんぞも、やつぱりこうかねえ、浜へはちつとでも放れているから、それでも幾干か少なかるうねえ。」

「やつぱり居ら、居るところか、もつと居ら、どしこと居るぜ。一つかみ打捕えて、

岡田螺とか何とかいつて、お汁の実にしたいようだ。」

とけろりとして真顔にいう。

三

こんな年していることの、世帯じみたも暮向き、塩焼く煙も一列に、おなじ霞の藁屋同士と、女房は打微笑み、

「どうも、三ちゃん、感心に所帯じみたことをおいだねえ。」

奴は心づいて笑い出し、

「ははは、所帯じみねえでよ、姉さん。こんのお浜ツ子が出来てから、己なりたけ小遣はつかわねえ。吉や、七と、一錢こを遣つてもな、大事に気をつけてら。玩弄物だのな、飴だのな、いろんなものを買つて来るんだ。」

女房は何となく、手拭の中に伏目になつて、声の調子も沈みながら、

「三ちゃんは、どうしてそんなだろうねえ。お前さんぐらいな年紀恰好じゃ、小児の持っているものなんか、引奪つても自分が欲しい時だのに、そうやってちつとずつ皆から貰うお小遣で、あの児に何か買つてくれてさ。姉さん、しみじみ嬉しいけれど、ほんとに三ちゃん、お前さん、お食ひなら可い、気の毒でならないもの。」

奴は嬉しそうに目を下げて、

「へへ、何、ねえだよ、気の毒な事はちつともねえだよ。嫁さんが食べる方が、己が自分で食べるより旨いんだからな。」

「あんなことをいうんだよ。」

と女房は顔を上げて莞爾と、

「何て情があるんだらう。」

熟じつと見られて独ひとりで領りやうき、

「だって、男は誰でもそうだけ。兄あにや哥ごだつてそういわあ。船で暴風雨あらしに濡れてもな、屋根代の要らねえ内で、姉あねさんやお浜こツ児こが雨露あめに濡れねえと思や、自分が寒い気はしねえとよ。」

「嘘うそばかり。」

と対あいて手が小児こどもでも女房は、思わずはつと赧あからむ顔。

「嘘うそじゃねえだよ、その代かわりにや、姉さんもそうやって働いてるだ。」

なあ姉さん、己おらが嫁よめさんだつて何なにだぜ、己おらが漁いさに出掛けたあとじゃ、やっぱり、張はりものをしてくんねえじゃ己おら厭いやだぜ。」

「ああ、しましようにとも、しなくつてさ、おほほ、三ちゃん、何を張るの。」

「え、そりや、何だ、またその時だ、今は着たツきりで何にもねえ。」

と面おもてくらつた身のまわり、はだかつた懐ふところ中ちゆうから、ずり落ちそうな菓子袋を、その時縁へ差置くと、鉄砲玉が、からからから。

「号外、号外ツ、」と慌あわただしく這はい身みで追掛おけて平手へいで横よこざまにポンと払はたくと、ころりとかえ

るのを、こつちからも一ツ払いて、くるりとまわして、ちよいとすくい、

「は、」

とかけ声でポンと口。

「おや、御馳走様ねえ。」

三之助はぐツと呑んで、

「ああ号外、」と、きよとりとする。

女房は濡れた手をふらりとさして、すツと立った。

「三ちゃん。」

「うむ、」

「お前さん、その三尺は、大層色気があるけれど、余りよれよれになったじゃないか、ついでだからちよいとこの端へはつておいて上げましょう。」

「何こんなものを。」

とあとへ退り、

「いまに解きます繻子の帯……」

奴は聞き覚えの節になり、中音でそそりながら、くるりと向うむきになったが早い、

ドウとしたたかな足踏あしづみして、

「わい！」

日向ひなたへのツそりと来た、茶の斑ふち犬が、びくりと退すきつて、ぱつと砂、いや、その遁にげ状ざまの慌あわただしさ。

四

「状ざまを見る、弱虫め、誰だと思おもうえ、小鳥の三之助だ。」

と呵から々と笑わらつて大得意。

「吃驚びっくりするわね、唐突だしぬけに怒鳴どなりつてさ、ああ、まだ胸がどきどきする。」

はツと縁側に腰をかけた、女房は草履かかとの踵かかとを、清くこぼれた褌つまにかけ、片手を背うしろ後に、あらぬ空を視ながめながら、俯うつむ向き通しの疲れもあつた、頬ほに胸を撫なで擦さする。

「姉あねさんも弱虫だなあ。東京から来て大尽のお邸やしきに、褌ひきずを引摺ひきずつていたんだから駄目だ、意気地はねえや。」

女房は手拭かを搔かい取とつたが、目まぶちのあたりほんのりと、逆のぼ上のぼせた耳にもつれかかる、

おくれ毛を撫でながら、

「厭いやな児こだよ、また裾すそを、裾をツて、お引摺りのように人聞ひとききが悪いわね。」

「錦にしき絵えの姉あね様さまだよ、見ねえな、皆みんな引摺ひきずりつてら。」

「そりや昔のお姫様さ。お邸は大尽おやしんの、稲葉いなば様の内うちだつて、お小間おこまづかいなんだもの、引摺ひきずりつてなんぞいるものかね。」

「いまに解ときます繻しゆ子の帯おびとけつかるだ。お姫様だつて、お小間使おこまぢだつて、そんなことは構かまわねえけれど、船頭ふねづかのおかみさんが、そんな弱虫よわむしじゃ不可いねえや、ああ、お浜はまッ児こはこは育てたくないもんだ。」と、機械きかいがあつて人形にんぎやうの腹はらの中で聞きえるような、顔かほには似にない高慢こうまんさ。

女房にようばうは打笑うちわらみつつ、向直むかひつて顔かほを見た。

「ほほほ、いうことだけ聞きいてみると、三ちゃんさんちゃんは、大層おほい強つよそうだけれど、その実意じつい気地きぢなしなしつたらないんだもの、何なによ、あれは？」

「あれはツて？」と目をぐるぐる。

「だつて、源次げんじさん千太ちたさん、理右衛門りえもん爺ぢいさんなんか来きると……お前まへさん、この五月ごごろから、粹いきな小鳥こどりといわれなくて、ベソを搔かいた三之助さんしゆすけだ、ベソ三べそさんだ、ベソ三べそさんだ。ついで

に鯨ほらと改名しろなんて、何か高慢な口をきく度に、番ごと籠こめられておいでじゃないか。何でも、恐こわいか、辛あついかしてきつと沖で泣いたんだよ。この人は、「とおかしそうに正まむき向むきに見られて、奴やつこは、口をむぐむぐと、顛はちまき巻まきをふらりと下げて、

「へ、へ、へ。」と俯向うつむいて苦笑せうい。

「見たが可いい、ベソちゃんや。」

と思おもわず軽かろく手をたたく。

「だつて、だつて、何だ、」

と奴やつこは口惜くやしそうな顔色かおいろで、

「己おらぐらいな年とし紀きで、鮪まぐろ船ふねの漕こげる奴やつは沢山たんとねえぜ。

ここいらの鼻はな垂なしは、よう磯いそだつて泳いげようか。たかだか堰せきでめだかを極きめるか、

古川の浅い処ところで、ばちやばちやと鮒ふなを遣やるだ。

浪打際なみうちといつたつて、一畝ひとつねり乗のつて見みねえな、のたりと天上てんじやうまで高たかくなつて、嶽たけの堂どう

は目の下だ。大風呂敷おほふゆの山やまじやねえが、一波越いちなみすと、谷底やもよ。浜はまも日本にっぽんも見みえやしねえで、

お星おほし様が映うつりそううで、お太陽おたいやう様さまは真ま蒼さおだ。姉あねさん、風かぜの可いい日ひでそうなんだぜ。

処ところを沖おきへ出でて一いっつ暴風雨ぼうふうと来きるか、がちやめちやの真ま暗くらやみで、浪なみだか滝たきだか分わらね

え、真水と塩水をちやんぽんにがぶりと遣つちや、あみの塩からをぺろぺろとお茶の子で、鼻唄を唄うんだい、誰が沖へ出てベソなんか。」

と肩を怒らして大手を振った、奴やつこ、おまわりの真似まねして力む。

「じゃ、何なんだつて、何だつてお前、ベソ三なの。」

「うん、」

たちまち妙な顔、けろけろと擬勢の抜けた、顛はらまき巻をいじくりながら、

「ありやね、ありやね、へへへ、号外だ、号外だ。」

五

「あれさ、ちよいと、用がある、」

と女房は呼止める。

奴やつこは遁げ足を向うのめりに、うしろへ引かれた腰こしつき附で、

「だつて、号外が忙しいや。あ、号外ツ、」

「ちよいと、あれさ、何だよ、お前、お待まちツてばねえ。」

衝と身を起こして追おうとすると、奴は駈出した五足ばかりを、一飛びに跳ね返つて、ひよいと踞み、立つた女房の前垂のあたりへ、円い頤、出額で仰いで、

「おい、」という。

出足へ唐突に突屈まれて、女房の身は、前へしないそうになつて踳踉いた。

「何だねえ、また、吃驚するわね。」

「へへへ、番ごとだぜ、弱虫やい。」

「ああ、可いよ、三ちゃん強うございますよ、強いからね、お前は強いからそのベソを搔いたわけをお話しよ。」

「お前は強いからベソを搔いたわけ、」と念のためいつてみて、瞬した、目が洩そう。

「不可ねえや、強いからベソをなんて、誰が強くてベソなんか搔くもんだ。」

「じゃ、やつぱり弱虫じゃないか。」

「だつて姉さん、ベソも搔かぎらに。夜一夜亡念の火が船について離れねえだもの。理右衛門なんざ、己がベソをなんていう口で、ああ見えてその時はお念仏唱えただ。」と強がりたさに目を睜る。

女房はそれかあらぬか、内々危んだ胸へひしと、色変るまで聞咎め、

「ええ、亡念の火が憑いたって、」

「おっと、……」

とばかり三之助は口をおさえ、

「黙ろう、黙ろう、」と傍を向いた、片頬に笑を含みながら吃驚したような色である。

秘すほどなお聞きたさに、女房はわざとすねて見せ、

「可いとも、沢山そうやってお秘しな。どうせ、三ちゃんは他人だから、お浜の婿さんじ

やないんだから、」

と肩を引いて、身を斜め、振り切りそうに袖を合わせて、女房は背向になんぬ。

奴は出る杭を打つ手つき、ポンポンと天窓をたたいて、

「しまった！ 姉さん、何も秘すというわけじゃねえだよ。

こんの兄哥もそういうし、乗組んだ理右衛門徒えも、姉さんには内証にしておけ、話す

と恐怖がるツていうからよ。」

「だから、皆で秘すんだから、せめて三ちゃんに聞かせてくれたって可じやないかね。」

「むむ、じゃ話すだがね、おらが饒舌つたつて、皆にいつちや不可えだぜ。」

「誰が、そんなことをいうもんですか。」

「お浜ッ児にも内証だよ。」

と密と伸上つてまた縁側から納戸の母衣蚊帳を差覗く。

「嬰児が、何を知つてさ。」

「それでも夢に見て魘されら。」

「ちよいと、そんなに恐怖い事なのかい。」と女房は縁の柱につかまつた。

「え、何、おらがベソを搔いて、理右衛門が念仏を唱えたくらいな事だけんども。そら、

姉さん、この五月、三日流しの鯉船で二晩沖で泊つたつげよ。中の晩の夜中の事だね。

野だも山だも分んねえ、ぼつとした海の中で、晩めに夕飯を食つたあとだよ。

昼間ツからの霧雨がしとしと降りになつて来たで、皆胴の間へもぐつてな、そんな時に千

太どんが漕がしつげえ。

急に、お寒い、お寒い、風邪揚句だ不精しよう。誰ぞかわんなはらねえかつて、艦

からドンと飛下りただ。

船はぐらぐらとしただがね、それで止まるような波じやねえだ。どんぶりこっこ、すつ

こっこ、陸へ百里やら五十里やら、方角も何も分らねえ。」

女房は打領いた襟さみしく、乳の張る胸をおさえたのである。

六

「晩飯の菜に、塩からさ嘗め過ぎた。どれ、糠雨でも飲むべい、とつてな、理右衛門ど
んが入交わって漕がしつけえ。

や、おぞいな千太、われ、えてものを見て逃げたな。と臚で爺さまがいわつしやるとの、
馬鹿いわつしやい、ほんとうに寒気がするだつて、千太は天窗から襦袢被つてころげた達
磨よ。

ホイ、ア、ホイ、と浪の中で、幽に呼ばれる声があるだね。

どこからだか分んねえ、近いようにも聞えれば、遠いようにも聞えるだ。

来やがった、来やがった、陽気が悪いとおもつたい！ おらもどうも疝気がきざした。

さあ、誰ぞ来てやつてくれ、ちつと踞まねえじや、筋張つてしよ事がない、と小半時で
また理右衛門爺さまが潜つただよ。

われ漕げ、頭痛だ、汝漕げ、脚気だ、と皆苦い顔をして、出人がねえだね。

平胡坐でちよつと磁石さ見さしつけえ、此家の兄哥が、奴、汝漕げ、といわしつたか

ら、何の気もつかねえで、船で達者なのは、おらばかりだ、おっとまかせ。」と、奴はやっこ顛は卷ちまきの輪を大きく腕うでいっぱいに占める真似して、

「いきなりとも艦へ飛んで出ると、船が波の上へ橋にかかつて、雨ですべ沁るといふもんだ。

どっこいな、と腰を極きめたが、ずつしりと手答えして、槻けやきの太木根こそぎにしたほどなおおきろ大い艦やつの奴、のツしりと搔いただがね。雨がしよぼしよぼと顛卷うねりに染みるばかりで、空だか水だか分らねえ。はあ、昼間見る遠い処の山の上を、ふわふわと歩ある行くようで、底が轟ごう々と沸うえくり返るだ。

ア、ホイ、ホイ、アホイと変な声が、真ま暗くらな海にも隅があつてその隅の方から響いて来ただよ。

西さ向けば、西の方、南さ向けば南の方、何でもおらがの向いた方で聞えるだね。浪のうね畷おんなじと同一おんなじに声こゑが浮いたり沈んだり、遠くなつたりな、近くなつたり。

その内ぼやぼやと火が燃えた。船から、沖へ、ものの十四五町と真ま黒くろな中へ、ぶくぶくと大きな泡が立つように、ぼつと光らあ。

やあ、火が点ともれたいツて、おらあ、吃驚びっくして喚わめくとな、……姉あねさん。」

「おお、」と女房は変つた声こゑ音。

「黙つて、黙つて、と理右衛門爺さまが胴の間で、苦の下でいわつしやる。

また、千太がね、あれもよ、陸の人魂で、十五の年まで見ねえけりや、一生逢わねえ
 というんだが、十三で出つくわした、奴は幸福よ、と吐くだあね。

おらあ、それを聞くと、艀づか握った手首から、寒くなつたあ。」

「……まあ、厭じゃないかね、それでベソを搔いたんだね、無理はないよ、恐怖いわねえ
 」。

とおくれ毛を風に吹かせて、女房も悚然とする。奴の顔色、赤蜻蛉、黍の穂も夕づく
 日。

「そ、そんなくれえで、お浜ッ児の婿さんだ、そんなくれえでベソなんか搔くべいか。

炎というだが、変な火が、燃え燃え、こつちへ来そうだで、漕ぎ放すべいと艀をおした
 だ。

姉さん、そうすると、その火がよ、大方浪の形だんべい、おらが天窓より高くなつたり、
 船底へ崖が出来るように沈んだり、ぶよぶよと転げやあがって、船脚へついて、海蛇のの
 たくるようについて来るだ。」

「……………」

「そして何よ、ア、ホイ、ホイ、アホイと厭な懸声がよ、火の浮く時は下へ沈んで、火の沈む時は上へ浮いて、上下に底澄んで、遠いのが耳について聞えるだ。」

七

「何でも、はあ、おらと同じように、誰かその、炎さ漕いで来るだがね。

傍へ来られてはなんねえだ、と艫づかを刻んで、急いでしゃくると、はあ、不可え。

向うも、ふわふわと疾くなるだ。

こりや、なんねえ、しよことがない、ともう打ちやらかして、おさえて突立つてびくびくして見ていたらな。やつぱりそれでも、来やあがつて、ふわりとやって、鳥のように、舳の上へ、水際さ離れて、たかつたがね。一あたり風を食って、向うへ、ぶくぶくとのびたつけよ。またいびつ形に円くなつて、ぼやりと黄色い、薄濁りの影がさした。大きな船は舳から胴の間へかけて、半分ばかり、黄色くなつた。婦人がな、裾を拵げて、膝を立てて、飛乗つた形だつけ。一ぱし大きさも大きいで、艫が上つて、向うへ重くなりそうだに、はや他愛もねえ軽いよ。

おらあ、わい、というて、艀を放した。

そんな時だ、われの、顔は真蒼だ、そういう汝の面は黄色いぜ、と苦の間で、てんでんがいったあ。——あやかし火が通ったよ。

奴、黙つて漕げ、何ともするもんじやねえツて、此家の兄哥が、いわつしやるで、どうするもんか。おら屈んでな、密とその火を見てやった。

ぼやりと黄色な、底の方に、うようよと何か動いてけつから。」

「えツ、何さ、何さ、三ちゃん、」と忙しく聞いて、女房は底の陰。

日向の奴も、暮れかかる秋の日の黄ばんだ中に、薄黒くもなんぬるよ。

「何だかちつとも分らねえが、赤目鰓の腸さ、引ずり出して、たたきつけたような、うようよとしたものよ。

どす赤いんだの、うす蒼いんだの、にちにち舳の板にくつついているようだっけ。

すぼりと離れて、海へ落ちた、ぐるぐると廻つただがな、大のしに颯とものして、一浪で遠くまで持つて行つた、どこかで魚の目が光るようによ。

おらが肩も軽くなつて、船はすらすらと迂り出した。胴の間じや寂りして、幽かに鼾も聞えるだ。夜は恐ろしく更けただが、浪も平になつただから、おらも息を吐いたがね。

えてものめ、何が息を吐かせべい。

アホイ、アホイ、とおらが耳の傍はたでまた呼ばる。

黙つて漕げ、といわつしやるで、おらは、スウとも泣かねえだが、腹の中で懸声さするかと思つただよ。

厭いやだからな、聞くまいとして頭あ掉ふつて、耳を紛らかしていたつけが、畜生、船に憑ついて火を呼ぶだつとよ。

波が平たいらだで、なおと不可いけえ。火の奴やつめ、苦なしでふわふわとしおつた、その時は、おらが漕いでいる艚はこの方へさ、ぶくぶくと泳いで来たが、急にぼやつと拡がった、狸きんたの擧あ丸ま八はち畳じょう敷じきよ。

そこら一面、波が黄色に光つただね。

その中に、はあ、細長い、ぬめらとした、黒い島が浮いたつけ。

あやかし火について、そんな晩は、鮫さめの奴が化けるだど……あとで爺じいさまがいわしつた。そういや、目だつぺい。真ま赤かな火が二つ空を向いて、その背中の突とつ先さきに睨にらんでいたが、しばらくするとな。いまの化ば鮫げさめめが、微塵みじんになつたように、大きい形はすぼりと消えて、百とも千とも数を知れねえ、いろんな魚うおが、すらすらすらすら、黄色な浪の上を渡りおつ

たが、化鮫めな、さまさまにして見せる。唐の海だか、天竺だか、和蘭陀だか、分ンねえ夜中だったけが、おらあそんな事で泣きやしねえ。」と奴は一息に勇んでいったが、言を途切らし四辺を視めた。

目の前なる砂山の根の、その向き合える猛獸は、薄の葉とともに黒く、海の空は浪の末に黄をぼかしてぞ紅なる。

八

「そうする内に、またお猿をやつて、ころりと屈んだ人間ぐれえに縮かまって、そこら一面に、さつと暗くなつたと思うと、あやし火の奴め、ぶらぶらと裾に泡を立てて、いきをついて畝つて来て、今度はおらが足の舵に搦んで、ひらひらと燃えただよ。

おらあ、目を塞いだが、鼻の尖だ。艦へ這上りそうな形よ、それで片つべら燃えのびて、おらが持つている艦をつかまえそうにした時、おらが手は爪の色まで黄色くなつて、目の玉もやつぱりその色に染まるだがね。だぶりだぶり舳さ打つ波も船も、黄色だよ。それだな、姉さん、金色になつて光るなら、金の船で大丈夫というもんだが、あやかしだか

らそうは行かねえ。

時々煙けむのようになつて船の形が消えるだね。浪が真黒まっくろに畝なつてよ、そのたびに化物め、いきをつけてまた燃えるだ。

おら一生懸命かきに、艫かきで搔かきのめしてくれたけれど、火の奴は舵かきにからまりくさつて、はあ、婦人の裾おんなが巻きついたようにも見えれば、爺じいの腰しんがしがみついたようでもありよ。大きい鮫あんこう鰯こうが、腹の中へ、白張しらはり提ち灯ちよう鵜ちん呑うみにしたようにもあつた。

こん畜生、こん畜生と、おら、じだんだを踏ふんだもんだで、舵かきへついたかよ、と理右衛門りえむ爺いさまがいわつしやる。ええ、引ひからまつて点とれくさるだ、というたらな。よくねえな、一あれ、あれようぜ、と滅め入いつた声で松公しょうこうがそういつけえ。

奴やつこや。

ひやあ。

そのあやし火の中を覗のぞいて見ろい、いかいこと亡もう者じやが居いらあ、地獄じやくの状さまは一見いえだ、と千太ちたどんがいうだあね。

小兒こどもだ、馬鹿ばかをいうない、と此家ここの兄哥あにやがいわしつけ。

おら堪たまなくなつて、ベソを搔かき搔かき、おいおい恐怖こわくつて泣なき出したあだよ。」

いわれはかくと聞えたが、女房は何にもいわず、唇の色が褪せていた。

「苦を上げて、ぼやりと光つて、こんの兄哥の形がな、暗中へ出さした。」

おれに貸せ、奴寝ろい。なるほどうつとうしく憑きやあがるツて、ハツと掌へ呼吸を吹かしたわ。

一しけ来るぞ、騒ぐな、といつて艫づかさ取つて、真直に空を見さしたで、おらも、ひとりでにすツこむ天窓を上げて視めるとな、一面にどす赤く濁つて来ただ。波は、そこに真黒な小山のような海坊主が、かさなり合つて寝てるようだ。

おら胴の間へ転げ込んだよ。ここにもごろごろと八九人さ、小さくなつてすくんでいるだね。

どこだも知んねえ海の中に、船さただ一艘で、目の前さ、化物に取巻かれてよ、やがて暴風雨が来ようというだに、生きて働くのはこんの兄哥、ただ一人だと思や心細いけんどもな、兄哥は船頭、こんな時のお船頭だ。」

女房は引入れられて、

「まあ、ねえ、」とばかり深い息。

奴は高慢に打傾き、耳に小さな手を翳して、

「轟——とただ鳴るばかりよ、長延寺様さ大釣鐘を半日天窓から被つたようだね。

うとうととこう眠つたつぺ。相撲を取つて、ころり投げ出されたと思つて目さあけると、船の中は大水だあ。あかを汲み出せ、大変だ、と船も人もくるくる舞うだよ。

苦も何も吹飛ばされた、恐しい音ばかりで雨が降るとも思わねえ、天窓から水びたり、

真黒な海坊主め、船の前へも後へも、右へも左へも五十三。ぬくぬくと肩さ並べて、手を組んで突立つたわ、手を上げると袖の中から、口い開くと咽喉から湧いて、真白な水柱が、から、倒にざあざあと船さ目がけて突菟る。

アホイ、ホイとどこだやら呼ばる声さ、あちらにもこちらにも耳について聞えるだね。」

九

「その時さ、船は八丁艦になつたがな、おららが呼ばる声じやねえだ。

やつぱりおなじ処に、舵についた、あやし火のあかりでな、影のような船の形が、薄ぼんやり、鼠色して煙が吹いて消える工合よ、すツ飛んじやするすると浮いて行く。

難有え、島が見える、着ける着ける、と千太が喚く。やあ、どこのか船も漕ぎつけた、

島がそこに、と理右衛門爺さま。直きそこに、すすくと山の形さあらわれて、暗の中突貫きぬいて大幅な樹の枝が、※のあいだに揺ぶれてな、帆柱さ突立つて、波の上を泳いでるだ。

血迷つたかこいつら、爺様までが何をいうよ、島も山も、海の上へ出たものは石塊一ツある処じやねえ。暗礁へ誘い寄せる、連を呼ぶ幽霊船だ。気を確たしかに持たつせえ、弱い音を出しやあがるなツて、此家の兄哥が怒鳴るだけんど、見す見す天竺へ吹き流されるだ、地獄の土でも構わねえ、陸へ上つて呼吸が吐きたい、助け船——なんのつて弱い音さ出すのもあつて、七転八倒するだでな、兄哥真直まっすぐに突立つて、ぶるツと身震みぶるをさしつけえよ、突然素裸すっぱだかになつただね。」

「内の人が、」と声を出して、女房は唾を呑んだ。

「兄哥がよ。おい。」

あやかし火さ、まだ舵に憑ついて放れねえだ、天窓から黄色に光つた下腹へな、鮪縄まぐろなわさ、ぐるぐると巻きつけて、その片端かたはじを、胴の間の横木へ結ゆわえつけると、さあ、念ばらした、娑婆しゃばか、地獄か見届けて来るツてな、ここさ、はあ、こんの兄哥が、渾名あだなに呼ばれた海雀うみすずめよ。鳥のようにびらりと匆はねたわ、海の中へ、飛込むでねえ——真白まっしろな波のかさなりかさなり崩れて来る、大きな山へ——駈上かけあがるだ。

百尋ばかり束ね上げた鮪繩の、舷より高かつたのがよ、一擲いにずつと伸した！
その、十丈、十五丈、弓なりに上から覗くのやら、反りかえつて、睨むのやら、口さあ
げて威すのやら、蔽わりかかつて取り囲んだ、黒坊主の立はだかつている中へ浪に揉まれ
て行かしつけえ、船の中ではその綱を勝手に取つて、理右衛門爺さま、その時にお念仏
だ。

やつと時が立つて戻つてござつた。舷へ手をかけて、神様のような顔を出して、何にも
ねえ、八方から波を打つける暗礁があるばかりだ、迷うな、ツていわしつた。

お船頭、御苦労じや、御苦労じや、お船頭と、皆握拳で拜んだだがね。

坊主も島も船の影も、さらりと消えてよ。そこら山のような波ばかり。

急に、あれだ、またそこらじゆう、空も、船も、人の顔も波も大きい大きい海の上さ半
分仕切つて薄黄色になつたでねえか。

ええ、何をするだ、あやかしめ、また拡がつたなツて、皆くそ焼けに怒鳴つたつけえ。

そうじやねえ、東の空さお太陽さまが上らつしたが、そこでも、姉さん、天と波と、上
下へ放れただ。昨夜、化鮫の背中出したように、一面の黄色な中に薄ぼんやり黒いも
のがかかつたのは、嶽の堂が目果へ出て来ただよ。」

女房はほつとしたような顔色で、

「まあ、可よかつたねえ、それじゃ浜へも近かつたんだね。」

「思つたよりは流されていねえだよ、それでも沖へ三十里ばかり出ていたつぺい。」

「三十里、」

とまた驚いた状さまである。

「何だなあ、姉あねさん、三十里ぐれえ何でもねえや。」

それで、はあ夜が明けると、黄色く環わどつて透通つたような水と天との間さ、薄あかりの中をいろいろな、片手で片身の奴やつだの、首のねえのだの、蝦蟇がまが呼吸いき吹くようなのだの、犬の背中へ炎からさ絡からまっているようなのだの、牛だの、馬だの、異形いぎようなものが、影燈籠かげとうろう見るようにふわふわまよつて、さつさと駈け抜けてどこかへ行くゆだね。」

十

「あとで、はい、理右衛門爺りえむじいさまもそういつけえ、この年になるまで、昨夜ゆうべぐれえ執念しゅうねん深んぶけえあやかしの憑ついた事はねえだつて。

姉さん。

何だつて、あれだよ、そんなに夜があけて海のぼけものどもさ、するする駈け出して失せるだに、手許が明るくなって、皆の顔が土気色になって見えてよ、艀が白うなったのに、艀にくいついた、えてものめ、まだ退かねえだ。

お太陽さまお庇だね。その色が段々蒼くなつてな、ちつとずつ固まつて掻いすくまつたようだつげや、ぶくぶくと裾の方が水際で膨れたあ、蛭めが、吸い肥つたようになつて、ほとりの波の上へ落ちたがね、からからと明るくなって、蒼黒い海さ、日の下で突張つて、刎ねてるだ。

まあ、めでてえ、と皆で顔を見たつげや、めでてえはそればかりじゃねえだ、姉さんも、新しい衣物が一枚出来たつぺい、あん時の鯉さ、今年中での大漁だ。

舳に立つて釣らした兄哥の身のまわりへさ、銀の鯉が降つたつげ、やあ、姉さん。」と暮れかかる蜘蛛の囀の櫓を仰いだ、奴の出額は暗かった。

女房もそれなりに咽喉ほの白う仰向いて、目を閉じて見る、胸の中の覚え書。

「じゃ何だね、五月雨時分、夜中からあれた時だね。

まあ、お前さんは泣き出すし、爺さまもお念仏をお唱えだつて。内の人はその恐しい浪

の中で、生命いのちがけで飛込んでさ。

私はただ、波の音が恐いので、宵から門かどへ鎖じょうをおろして、奥でお浜と寝たつけ、ねえ。どんな烈はげしい浪が来ても裏の崖がけは崩れない、鉄の壁だ安心しろって、内の人がおいだから、そればかりをたよりにして、それでもドンと打ぶつかるごとに、崖と浪とで戦いくさをする、今打った大砲で、岩が破れやしまいかと、坊やをしつかり抱くばかり。夜中に乳のかれるのと、寂しいばかりを慾よぐにして、冷つめたいとも寒いとも思わないで寝ていたのに、そうだったのか、ねえ、三ちゃん。

そんな、荒浪だの、恐いあやかし火とやらだの、黒坊主だの、船幽霊ふなゆうれいだのの中で、内の人は海から見りや木の葉このような板一枚に乗っていてさ、」と女房は首垂れつつ、

「私にや何にもいわないんだもの……」と思わず襟ひとしずくに一雫、ほろりとして、

「済まないねえ。」

奴やつこは何の仔細しさいも知らず、慰め顔に威勢の可い声、

「何も済まねえって事ことありやしねえだ。よう、姉あねさん、お前に寒かったり冷たかったり、辛い思いさ、さらせめえと思うだから、兄あにや哥やがそうして働はたらくだ。おらも何だぜ、もう、そんな時さあつたってベソなんか搔かきやしねえ、お浜ツ子の婿むこさんだ、一所に海へ飛込むぜ。

そのかわり今もいつけえよ。兄哥あにやのために姉さんが、お膳立ぜんだてしたり、お酒買つたりよ。おら、酒は飲まねえだ、お芋いもで可いいや。

よツしよい、と鰹いわしさ積んで波に乗込んで戻つて来ると、……浜に煙なびが靡なびきます、あれは何ぞと問うたれば」

と、いたいけに手をたたき、

「石いし々いし合あわせて、塩しほ汲くんで、玩おも弄ちやのバケツでお芋煮いもで、かじめをちよろちよろ焚たくわ

いのだ。……よう姉あねさん、」

奴やつこは急にぬいと立ち、はだかつた胸を手で仕切つて、

「おらがここまで大きくなつて、お浜ひらツ子が浜へ出て、ままするはいつだろうなあ。」

女房は夕露の濡れた目許の笑顔優しく、

「ああ、そりやもう今日明日という内に、直ただきに娘になるけれど、あの、三ちゃん、」
と調子をかえて、心ありげに呼びかける。

「ああ、」

「あのね、私は何も新しい衣物きものなんか欲しいほしとは思わないし、坊やも、お菓子も用いらないから、お前さん、どうぞ、お媚さんになつてくれる気なら、船頭はよして、何ぞ他ほかの商売しょうばいにしておくね、姉さんねえ、お願いだがどうだろうね。」

「と思ひ入ったか言ことばもあらため、縁に居ゐずまいもなおしたのである。」

「奴やつこは遊び過ぎた黄昏たそがれの、鴉からすの鳴くのをきよるきよる聞いて、浮足うづきに目も上あつぎ、

「姉さんあね、稲葉丸は今日さ日帰りだつぺいか。」

「ああ、内でもね。今日は晩方までに帰るつて出かけたがね、お聞きよ、三ちゃん、」

「とそわそわするのをおさ圧おさえていったが、奴やつこはよくも聞かないで、

「姉さんあねこそ聞きねえな、あらよ、堂たけの嶽たけから、鳥が出て来た、カオ、カオもねえもんだ、盗賊どろぼうをする癖くせにしやあがつて、漁いしさえ当ると旅をかけて寄つて来やがら。」

「姉さん船が沖へ来たぜ、大漁だ大漁だ、」

「と鳥の下で小さく躍る。」

「じゃ、内の人も帰つて来よう、三ちゃん、浜へ出て見ようか。」と良人おととの帰る嬉しさに、何事も忘れた状さまで、女房えもんは衣紋えもんを直した。

「まだ、見えるような処まで船は入りやしねえだよ。見させえ。そこらの柿の樹の枝なんか、ほら、ざわざわと烏めい、えんこをして待つてやがる。

五六里の処、嗅ぎつけて来るだからね。ここに待つていて、浜へ魚の上るのを狙うだよ、浜へ出たつて遠くの方で、船はやつとこの烏ぐれえにしか見えやしねえや。

やあ、見させえ、また十五六羽遣つて来た、沖の船は当つたぜ。

姉さん、また、着るものが出来らあ、チョツ、」

舌打の高慢さ、

「おらも乗つて行きや小遣が貰えたに、号外を遣つて儲け損なつた。お浜ツ児に何にも玩弄物を買えねえな。」

と出額をがツくり、爪尖に蠣殻を突ツかけて、赤蜻蛉の散つたあとへ、ぼたぼたと溢れて映る、烏の影へ足礫。

「何をまたカオカオだ、おらも玩弄物を、買お、買おだ。」

黙つて見ている女房は、急にまたしめやかに、

「だからさ、三ちゃん、玩弄物も着物も要らないから、お前さん、漁師でなく、何ぞ他の商売をするように心懸けておくんないよ。」という声もうるんでいた。

奴やつこははじめて口を開け、けろりと真顔で向直つて、

「何だつて、漁師やを止めて、何だつて、よ。」

「だつても、そんな様子じゃ、海にどんなものが居ようも知れない、ね、恐こわいじゃないか。内の人や三ちゃんさんが、そうやって私たちを留守にして海へ漁をしに行つてる間に、あらしが来たり浪が来たり、そりやまだいいとして、もしか、あの海から上つて私たちを漁しに来るものがあつたらどうしよう。貝が殻へかくれるように、家うちへ入つて窘すくんでいても、向うが強ければ捉つかまえられるよ。お浜は嬰あかんぼ児だし、私はこうやって力がないし、それを思うとほんとに心細くつてならないんだよ。」

としみじみいうのを、呆あきれた顔して、聞き澄ました、奴やつこは上唇を舌で嘗なめ、眦めじりを下くだげて哄くつくつ々とふき出し。

「馬鹿あ、馬鹿あいわねえもんだ。へ、へ、へ、魚うおが、魚が人間を釣りに来てどうするだ。尾で立つてちよこちよこ歩ある行あるいて、鰭ひれで棹さおを持つのかよ、よう、姉あねさん。」

「そりや鰹かつおや、鯖さばが、棹さおを背負しよつて、そこから浜を歩ある行あるいて来て、軒しやがへ踞しゃがむとはいわないけれど、底の知れない海だもの、どんなものが棲すんでいて、陽気の悪い夜なんぞ、浪に乗つて来ようも知れない。昼間だつて、ここへ来たものは、——今日は、三ちゃんばかりじ

やないか。」

と女房は早や薄暗い納戸の方かたを顧みる。

十二

「ああ、何だか陰気になって、穴の中を見るようだよ。」

とうら寂しげな夕間暮ゆうまぐれ、生干なまびの紅絹もみも黒ずんで、四辺あたりはものの磯いその風。

奴やつこは、旧来もとた黍きびがらの瘦やせた地蔵やの姿して、ずらりと立並こみちぶ径ちを見返り、

「もつと町の方へ引越して、軒へ瓦斯燈がすとうでも点つけるだよ、兄哥あにやもそれだから稼かせぐんだ。」

「いいえ、私や、何も今のくらしにどうこうと不足をいうんじゃないんだわ。私は我慢をするけれどね、お浜が可哀かわいそうだから、号外屋でも何んでもいい、他ほかの商売しょうばいにしておくれて、三ちゃん、お前に頼たのむんだよ。内の人うちの人が心配しんぱいをすると悪いから、お前まへ決して、何んにもいうんじゃないよ、可いいかい、解わかつたの、三ちゃん。」

と因果いんぐわを含めるようにいわれて、枝えだの鴉からすうなずも領うりやうき顔。

「むむ、じゃ何だ、腰こしに鈴かねをつけて駈かけまわるだ、帰かえったら一番、爺じいさま様さまと相談さうだんすべいか、

だつて、お錢あしにやならねえとよ。」

と奴やつこは悄しよ乎かげて指かを嚙かむ。

「いいえさ、今が今というんじやないんだよ。突然いきなりそんな事をいつちや不可いけいよ、まあ、話わだわね。」

と軽くいつて、気をかえて身を起した、女房は張はり板いたをそつと撫なで、

「慾張よくつたから乾かき切きらない。」

「何なに、姉あねさんが泣なくからだ、」

と唐だしぬけ突つにいわれたので、急に胸むねがせまつたらしい。

「ああ、」

と片かた袖そでを目めにあてたが、はツとした風かぜで、また納戸のうどを見た。

「がさがさするね、鴉からすが入いりやしまいねえ。」

三之助さんじゆすけはまた笑わらい、

「海うみから魚いさなが釣つりに来ただよ。」

「あれ、厭いや、驚おどかしちや……」

お浜はまがむずかつて、蚊帳かやが動く。

「そら御覽な、目を覚ましたわね、人を驚かすもんだから、」

と片頬かたほに莞爾にっこり、ちよいと睨にらんで、

「あいよ、あいよ、」

「やあ、目を覚さましたら密そつと見べい。おらが、いろツて泣かしちや、仕事の邪魔するだから、先刻さつぎから辛抱してただ。」と、かごとがましく身を曲くる。

「お逢あいなさいまし、ほほほ、ねえ、お浜、」

と女房は暗い納戸で、母衣蚊帳ほろがやの前みじろで身動みじろぎした。

「おつと、」

奴やつしは縁えんに飛びついたが、

「ああ、跣足はだしだ姉あねさん。」

と脛すねをもじもじ。

「可いいよ、お上りよ。」

「だって、姉あねさんは綺麗きれいすぎだからな。」

「構かまわないよ、ねえ、」

と行って、抱かかき上げた児こに頬摺ほおすりしつつ、横に見向いた顔が白い。

「やあ、もう笑つてら、今泣いた鳥が、」

と縁端えんはしに遠慮して遠くで顔をふつて、あやしたが、

「ほんとに騒々しい鳥だ。」

と急に大人びて空を見た。夕空にむらむらと嶽たけの堂を流れて出た、一団の雲の正中ただなかに、颯さつと揺れたようにドンと一発、ドドド、ドンと波に響いた。

「三ちゃん、」

「や、また爺さまが鴉をやつた。遊んでるツて叱られら、早くいって庄おきえべい。」

「まあ、遊んでおいでよ。」

と女房は、胸の雪を、児こに暖く解きながら、斜めに抱いて納戸口。

十三

「ねえ、今に内の人^もが帰つたら、菜のものを分けてお貰もらい、そうすりや叱おきられはしないからね。何だか、今日は寂しくツて、心細くツてならないから、もうちつと、遊んで行つておくれ、ねえ、お浜、もうお父とつさんがお帰りだね。」

と顔に顔、児こにいいながら縁へ出て来た。

おくれ毛の、こぼれかかる耳に響いて、号外——号外——とうら寂しい。

「おや、もういつてしまったんだよ。」

女房は顔を上げて、

「小児こどもだねえ」

と独りでいったが、檐のきの下なる戸外おもてを透かすと、薄黒いのが立っている。

「何だねえ、人をだましてさ、まだ、そこに居るのかい、此奴こいつ、」

と小児こどもに打ぶたせたように、つかつかと寄ったが、ぎよつとして退すきった。

檐下の黒いものは、身の丈三之助の約三倍、朦朧もうろうとして頭つむりの円い、袖の平たい、入道

であつた。

女房は身をしめて、キと唇を結んだのである。

時に身じろぎをしたと覚おぼしく、彳たたずんだ僧の姿は、張板はりいたの横へ揺れたが、ちようど浜へ

出るその二頭の猛獣まもに護まもられた砂山の横穴のごとき入口を、幅一杯に塞ふさいで立つた。背高

き形が、傍わきへ少し離れたので、もう、とつぷり暮れたと思う暗さだった、今日はまだ、一ひ

条海とすじの空に残っていた。良人おととが乗った稲葉丸は、その下あたりを幽かすかな横雲。

それに透すと、背のあたりへぼんやりと、どこからか霧が迫って来て、身のまわりを包んだので、瘡せたか、肥えたか知らぬけれども、窪んだ目の赤味を帯びたのと、尖つて黒い鼻の高いのが認められた。衣は潮垂れてはいないが、潮は足あとのように濡れて、砂浜を海方へ続いて、且つその背のあたりが連りに息を吐くと見えて、戦っているのである。

心弱き女房も、直ちにこれを、怪しき海の神の、人を漁るべく海から頭われたとは、余り目のあたりゆえ考えず。女房は、ただ総毛立つた。

けれども、厭な、気味の悪い乞食坊主が、村へ流れ込んだと思つたので、そう思うと同時に、ばたばたと納戸へ入つて、箆筒の傍なる暗い隅へ、横ざまに片膝つくつと、忙しく、しかし、殆んど無意識に、鳥目を。

早く去つてもらいたさの、女房は自分も急いで、表の縁へするすると出て、此方に控えながら、

「はい、」

という、それでも声は優しい女。

薄黒い入道は目を留めて、その挙動を見るともなしに、此方の起居を知つたらしく、今、報謝をしようと嬰兒を片手に、掌を差出したのを見も迎えないで、大儀らしく、かつ

たるそうに頭つむりを下に垂れたまま、緩ゆるく二ツばかり頭かぶりを掉ふつたが、さも横柄おうへいに見えたのである。

また泣き出したを揺ゆりながら、女房は手持無沙汰てもちぶさたに清すずしい目を睜みはつたが、

「何なにですね、何が欲ほいんですね。」

となお物貫ものもらいという念うは失うせぬ。

ややあつて、鼠ねずみの衣ぬいの、どこが袖そでともなしに手首てしづを出して、僧そうは重いもののように指さを挙あげて、その高い鼻はなの下したを指さした。

指さすとともに、ハツという息いきを吐つく。

渠かれ飢うえたり矣や。

「三ちゃん、お起きよ。」

ああ居ゐてくれれば可よかった、と奴やつこの名なを心こゆかし、女房にようばうは氣き転てんらしく呼よびながら、また納戸なうどへ。

強盗に出逢つたような、居もせぬ奴を呼んだのも、我ながら、それにさへ、動悸は一
倍高うなる。

女房は連りに心急いで、納戸に並んだ台所口に片膝つきつつ、飯櫃を引寄せて、及
よびごしに水桶から水を結び、腰に手桶から水を結び、効々しゆう、嬰兒を腕に抱いたまま、手許も上の空で覚
束なく、三ツばかり握飯。

潮風で漆の乾びた、板昆布を折つたような、折敷にのせて、カタリと櫃を押遣つて、立
てていた踵を下へ、直ぐに出て来た。

「少人数の内ですから、沢山はないんです、私のを上げますからね、はやく持つて行つて
下さいまし。」

今度はやや近寄つて、僧の前へ、片手、縁の外へ差出すと、先刻口を指したまま、鱗で
もありそうな汚い胸のあたりへ、ふらりと釣つていた手が動いて、ハタと横を払うと、発
奮か、訝か、折敷ぐるみ、バツタリ落ちて、昔々、蟹を潰した渋柿に似てころりと飛んだ。

僧はハアと息が長い。

あまり余の事に熟と視て、我を忘れた女房、

「何をするんですよ。」

一足退きつつ、

「そんな、そんな意地の悪いことをするもんじゃありません、お前さん、何が、そう気に入らないんです。」

と屹ぎつといったが、腹立つ下に心弱く、

「御坊おぼうさんに、おむすびなんか、差上げて、失礼だとおっしゃるの。」

それでは御膳おぜんにしてあげましょうか。

そうしましょうかね。

それでははじめから、そうしてあげるのだったんですが、手はなし、こうやって小児こどもに世話が焼けますのに、入相いりあいで忙せわしいもんですから。……あの、茄子なすのつき加減なのがありますから、それでお茶づけをあげましょう。」

薄暗うなずがりに頷うなずいたように見て取った、女房は何となく心が晴れて機嫌よく、

「じゃ、そうしましょう。お前さん、何にもありませんよ。」

勝手へ後姿になるに連れて、僧はのツそり、夜が固かたまつて入ったように、ぬいと縁側から上り込むと、表の六畳は一杯に暗くなった。

これにギョツとして立淀たちよとんだけれども、さるにても婦人おんな一人。

ただ、ちつとも早く無事に帰してしまおうと、灯をつける間ももどかしく、良人の膳を、と思うにつけて、自分の気の弱いのが口惜かったけれども、目を瞑って、やがて嬰兒を襟に包んだ胸を膨らかに、膳を据えた。

「あの、なりたけ、早くなさいましよ、もう追ッつけ帰りましょう。内のはいつこくで、気が強いんでござんすから、知らない方をこうやって、また間違いにでもなると不可ません、ようござんすか。」

と茶碗に堆く装つたのである。

その時、間の四隅を籠めて、真中処に、のツしりと大胡坐でいたが、足を向うざまに突き出すと、膳はひしやげたように音もなく覆つた。

「あれえ、」

と驚いて女房は腰を浮かして遁げさまに、裾を乱して、ハタと手を支き、

「何ですねえ。」

僧は大いなる口を開けて、また指した。その指で、かかる中にも袖で庇つた、女房の胸をじりりとさしつづつ、

(児を呉れい。)

と聞いたと思うと、もう何にも知らなかった。

我に返つて、良人の姿を一目見た時、ひしと取とりすが継がつて、わなわなと震えたが、余力強く抱いたせいか、お浜は冷つめたくなつていた。

こんな心弱いものに留守をさせて、良人が漁すなごる海の幸よ。

その夜はやがて、砂白く、崖がは蒼あおき、玲れいろう瓏たうたる江見の月に、奴やつこが号外、悲しげに浦を駈かけ廻つて、蒼わたつみ海の浪ぞ荒かりける。

明治三十九年（一九〇六）年一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年10月24日第1刷発行

2004（平成16）年3月20日第2刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第九卷」岩波書店

1942（昭和17）年3月30日発行

入力：土屋隆

校正：門田裕志

2006年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

海異記

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>